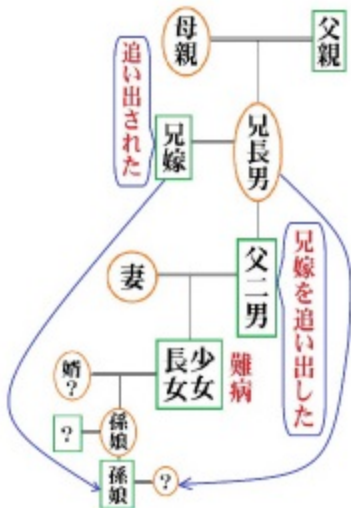


お父さん
兄嫁さんに
謝って！

悪霊は導き
昔の風水とは





悪霊は導き。

もう二十数年前、難病に冒され車椅子生活をしている少女に出会った。

お伺いして内容を聞いてみると、「先祖の祟りだからご祈祷しないと治らない」「悪霊に取り憑かれているから除霊しないといけない」「この土地には地縛霊が憑いている」「鬼門にトイレや風呂場があるので改造をしないといけない」と祈祷師や霊能者、風水士などに言われるのを鵜呑みにして、両親は一千何百万円以上多額のお金を支払ったり、改造費に一千五百万円以上かけたりしたが、一人娘さんは一向に良くなる。

霊気を調べて見ても、少しは感じられるが、悪霊でも地縛霊でもないので、悪霊は導きを分かってもらうために、命の絆の法則を説いたが、理解してもらうのが困難だった…。

少女の父は実家の跡を継ぎ先祖供養を真剣にしている二男だったからである。

父二男が跡を継ぐ前は、兄夫婦が両親と一緒に住んでいたが、母

親と兄嫁と嫌悪になった。

それを見かねた父二男が憎しみを込めて、

兄嫁に、

「出て行け！ 二度とこの家の敷居をまたぐな」

と言い、兄夫婦を追い出し、父二男夫婦が家を継ぎ、間もなく少女が生まれ、労っていた両親が相次いで亡くなり、毎日欠かさず先祖供養をしている。

両親が亡くなってから、少女に異変が起きたと言われ、日に日に食べる事が出来なくなり、足腰が弱くなり立てなくなり、医学でも分からず、学校へも行けない状態になった。

父親はどんなことをしても治してあげたいと思っているが…。

二男にとって兄嫁は前世の母。

「あなたと兄嫁さんと前世の〔母と息子長男〕で、追い出した兄嫁さんと娘さんの命と同じになるから、怨みや憎しみを捨て去り、会って詫びない限り治らない」

と言った途端に、

「帰れ！」

と怒鳴られ帰えらなければならなかった。

半年たったある日、電話の相手は奥さんだった。

「私と娘だけでもあなたのお話を聞きたい」

と言われたが、

「ご主人はなんと言っていますか？」

「主人は兄嫁を憎んでいて話にはならないと思います」

「娘さんはそこにいますか？」

「はい！」

少したってから、

「いままでいろんな人が家に来てくれたけど、おじさんみたいに真剣に話をしてくれる人に出会ったことがなかった」

と電話の向こうで話し始めた。

「今までの人は『先祖の祟りや因縁だ』『家相のどこそこが悪いか

ら直したりしないと治らない』と、私のことには気にもとめなかったけど、おじさんだけが命はひとつで、霊糸で結ばれていると言われたことが、耳に残っていたのでその話を聞きたいの」

魂はたったの一つから始まった。

「神の世界では命も魂もひとつだけだよ。その命が二つになって、四つになって増えているけど、たったひとつの命と魂で結ばれているのだよ。でも人間界では二つの命と魂が陰と陽にならないと存在が分からず、憎しみや怨みを消すことができないから、一番嫌いな人を許すために神様と約束し、前世の母を捜し求めて再会することなのだよ。お父さんにとって現世の母は実の母親だけど、前世の母は追い出した兄嫁さんで、性格が陰と陽に真反対になることを気づくだけだよ」

と話をし始めたが、電話の向こうですすり泣くような声がある。

「あなたとお父さんは、同じ命の絆で結ばれていて、そのもっと前から、お父さんが追い出した兄嫁さんとは、命の絆で結ばれていたのに、何か勘違いしてしまったのだよ。お父さんは…」

と言った途端に、泣き声が大きくなったので、その受話器をお母さんと替わった。

「電話ではなんですから、もう一度、会っていただけませんか？」

「私で良ければ……」

お伺いしたなら不機嫌なお父さんが、

「わしはそんな話を信じないが、娘と妻がどうしてもと言うから」

と切り出したが、

私は、

「あなたと娘さんの命はひとつに結ばれていて、娘さんに男の子が誕生すれば、あなたの命が生まれ、女の子が生まれてくれば、あなたの奥さんが生まれてくるのです。その命はあなたが大切だから生まれてくるのです。そのあなたの命をあなた自身で命の絆を切ろうとしている」

お父さんは目頭を押さえ、

「どうすればいいのか？」

「兄嫁さんに会うことです」

「あの鬼嫁に！」

「そうです。あなたの娘さんに二人目の女の子が生まれると、あなたが憎んでいる兄嫁さんが生まれて、その女の子が結婚する相手はあなたのお兄さんと同じ命に出会うようになり、それが命の絆の再会になるのです。そのかわいい孫娘さんが嫁ぎ先の弟から、『出来の悪い兄嫁だ。出て行け』と言われたならどうしますか？」

お父さんは泣き始めた。

それを見た娘さんが、

「おじさん！ もういいの。お父さんが分かってくれただけで、もうこれ以上お父さんを苦しめないで。私は結婚もできないし子供を産めない体になってしまっているの」

私はそれ以上何も言えない。

だがそのお父さんが、

「私の考えが間違っていた……………」

と一言。

「親孝行や供養より墓参りより、もっと大切なことがあることに気づけば、いろいろなことが変わります」

「わしは兄夫婦に会いに行く」

「命の絆の法則を理解していただき、ありがとうございました」

と帰ってきた。

だが……………。

兄嫁に会わなかった。

お父さんは、意味は分かり理解したが、実行しなかったと聞いた私は、

「……………」

何も言えず、その後、夫婦は離婚し、ご主人は宗教の餌食になり、家屋敷を売り払い、どこに行ったのか定かでない……………。

離婚した奥さんは娘さんを引き取り、誰にも知られない田舎でひ

っそりと暮らしているとのこと。

もう少し前からその夫婦と出会っていれば……………。

もう少し前に少女に出会っていれば……………。

追い出した兄嫁に詫びてくれれば治ったのに…。

親に孝行するよりも、兄夫婦の立場を守ってあげれば、何も起きず、もっと幸せになれるのに…。

大部分の人は先祖供養や墓参りや親孝行をしないと、崇りや因縁になると言われるほうを信じて、命の絆の法則や魂のゆくえの原理を分かってもらえない。

私のいたらなさを痛感する。

花一輪を探し求める人生を送ることがいかに難しいか……………。

私は最初に書いた命の絆の法則で何度も宗教弾圧を受けた。

親からも、

「勘当だ！ 出て行け。二度と夫婦でここに戻ってくるな」

と言われ、兄妹や親戚からも見捨てられ啓蒙思想だと言われた。

風水とは。

No. 1、いまの風水。

昔の人が生きてきた智慧と、今の世の中の文明開化との違いが分かるのではないのかと思う。

向こう三軒両隣のために、風水を編み出したことが分かるのではないか。

よく家相の相談で風水のことを聞かれる。

- ・どちらの方位に何色の物を置いたらよいか？
- ・良くなるためには、何処に盛り塩を置けばよいか？
- ・毎日塩を撒かなければ幸せになれないのか？
- ・風水を知らないより知っている方がいいのか？
- ・利用しなければ幸せになれないのか？

実際に風水の本を買って実行した人たちはどうだろうか？

- ・ためしても変わらない。
- ・利用してみたなら良くなった。
- ・夫婦喧嘩になってしまった。
- ・変な霊に取り憑かれてしまった。

・気分的には良くなったような気がするが分からない。

つぎの方法の本が出たから買って見て、実行しても変わらないからと、つぎから次へと本を買いあさって、結局一時期のブームになってしまう。

よくテレビで

「何々が健康によいから！」

「この野菜はどの病気に効くそうだ！」

「この方法をすれば健康になれるから！」

「みんなが言うから効きそうだ！」

と思い、つぎつぎに新しい食べ方や健康法を放映するが、一向に健康になった人はいなく、病院は大繁盛である。

大部分の人は「何故だろう……………」と不思議がっている。

昔の風水が分かれば少しは心が変わるのではないかと思う。

No. 2、日本の風土。

現在では核家族単位から一個人単位になり始めたが、昔の人は家族が仲良く暮らすためには、向こう三軒両隣の人たちと共に生き、

お隣さんに恥や迷惑をかかせないように、共に仲良く暮らすことを目的にしていた。

自分に恥をかきたくないのではなく、親や村人に恥をかかせたくないという思いがあり、向こう三軒隣が争いやイザコザが無く共存共栄するために、地相を確保し家相を確率してきた。

地相の元は群が安全に住めることが第一条件であり、群の安全が確保できれば、地域の付き合いが円満にできるから、扇状地や湿気の多い所、崖の下やカーブの外側などを避けて群を作った。

地相が確保できたなら、今度はお互いが採光問題を確保することをあみ出し、向こう三軒両隣の家々に、お日様が行き届くような南や東南向きに母屋を設定した。

群は村になり村から町になり国が繁栄してきたのは、農耕民族が同じ向きに母屋を配置し、お日様を敬い他人に迷惑や恥をかかせた

くないという思いがあったからではないか。

日本の地図を見れば、国土は山が大部分占めていて平野が少なく、平野があっても川に橋を架けられるところが少なく、交通事情を考えると、他人同士が寄り添って生活するしかなく、共同の井戸を掘り、同じ間取りの家を造り、同じように右手で箸を持ち、左手で茶碗を持つように、幼い頃から躰られて育ってきたのは、お互いが共同作業で助け合うためと嫁いできた若嫁さんでも、自分の実家と同じ間取りで違和感がなく、快くお手伝い出来るからである。

そこに風水が必要になってきたが、風水といっても群や村や町にとって集団で生活するのに、大切だから取り入れた。

向こう三軒両隣が同じ間取りは、ドングリの背比べにもなるが、競争心や張り合うこともなく、お互いが安心や信頼関係を保つことができるからである。

これは余談だが、学生服やセイラー服も、同じ学びの技を極めるために着るもので比較競争するのではなく、同じ志を持ち、心を豊

かにすることを目的にしていた。

風と水の配置を考えた結果、垣根はあまり高くせず、格子戸を風が緩やかに流れるように作り、井戸は東の方に配置し、お互いの土地を少しずつ分け合い、溝を作り排水を確保し、右回や東に流れる工夫をした。

木戸や背戸の出入りは、兄弟や親族で寄り添うのではなく、お互い赤の他人と共存共栄をより深く交流ができるようにし、連絡（回覧板）を密にするためだが、いまは他人同士の木戸の出入り口をやめ、
兄妹同士の木戸に成り下がってしまった。

本家と分家を保つために兄弟は、同じ敷地や同じ通り道に住まわせず、嫁がせた娘さんも近づけず、向こう三軒両隣を大切にし、兄弟の恩を他人に返すことで本家と分家が守り合っていた。

兄弟は墓地も同じ筋道をさけて建立したが、いまは反対に隣を選びたがるようになり、もめ事を引き寄せてしまっている。

No. 3、日本の陰陽和合。

つぎに陰陽和合だが字の如く陰と陽を組み合わせで、お互いが争いをさける方法と、相手を威圧する方法があり、争いをさける陰陽和合と、相手を威圧する孫子の兵法や呉子の兵法のように、軍事の戦略として使われるようになったが、兵法のことはまず別にして、陰陽和合を説いていこう。

お隣さんとのお祝い事や弔いや法事、庚申様やお日待ちなどの行事を共に待ちわび契りを深めるために、自分の家を陰にし、公の祝い事を陽として和合しあい、共同でお手伝いをするために、赤の他人が集まる家が母屋だから、表裏一体や清濁併せ飲むように、お互いあざなえる縄の如し共存共栄を測り、他人の子供でも自分の子供でも分け隔てなく、叱るときは叱り喜ぶときは共に喜んだ。

〔起きて半畳、寝て一畳、食べる米は二俵二斗半〕という諺があるが、一人分の食いぶちは三俵与えられ、あとの残りの半斗分は法事や弔い事、お祝いなどに用いるように残しておいた。

母屋には明るい部屋と暗い部屋の陰と陽があり、年寄りや親の寝

る部屋は暗い部屋（西北や北）を選び隠居部屋とし、若い人たちは明るい部屋（東や東南）に寝起きをしていた。

なぜ年寄りが暗い部屋なのかは、[老いては子に従え]のように、いつまでも自分の地位を保とうとすると、若い人たちが働かなくなったり、怠けさせたりしないという計らいもあると同時に、暗い部屋の方が、体が温まるからだ。

陰から陽になり、陽から陰になる。

陽があるから陰がある。

陰は陽のお陰や陽は陰のお陰様で、陰の中に陽があり、陽の中に陰がある。

これが荀子の「不平等の中に平等がある」を重んじたお陰様になる。

また男を陽にし、女を陰にしたのも母屋の形からしてもうなずけるので、あとから書こうと思う。

昔の人は自然に親子や村人のつながりを無言で実践し、子供たちに教えていたのが習慣であり、日本の国体の元になっていたのではないのか？

No.4、村八分。

村や町を守るためや団結心重んじるために、江戸時代に十の決まり事を作った。

それは、冠 結婚式 出産 病 旅立ち(湯治) 普請 水害 お年忌(法事) 火事 弔い(葬儀)である。

だが秩序を乱した人を戒めるために、村八分という風習も同時に作り、罪人の付き合いを二分だけ残した日本人の温情がある。

その二分とは火事と弔いである。

どんな罪人でも村から追い出せば、無法者や荒くれ人になるから、火事と弔いだけは悲しいことだから協力して付き合った。

それは自分の村は良くて、ほかの村に迷惑をかけないと言う計らいなのだが、「あいつは村八分だ」「あんなやつと付き合うな」と悪く考える人も多いのも事実だが、日本人の温情を悪く取れば悪くなり、よく取れば良い人になる。

これがいじめ問題にもなりかねない。

村八分は極悪非道な罪人でも陰陽和合で出会え「私みたいなことをするとこうなるよ」と教えてくれたのだから、悪くとらずに「い

い体験を教えてくれてありがとう〕〔あなたの命に出会えてありがとう〕と思うだけなのだが、それを理解しないから、つぎから次へと同じことを繰り返しているのが現状ではないのか…。

ちなみに昔はどんな村にも自警団という組織があり、幼いころから拍子木でカチカチと叩きながら「火の用～心。マッチ一本火事の元」「サンマ焼いても家焼くな。火の用～心」「赤子鳴いても火を離れるな」と家々を回っていた。

上級生は下級生を思いやり、下級生は上級生を慕い敬い、村の団結心や秩序を、知らず知らずのうちに養っていった。

No.5、家庭とは。

家庭とは字の如く家と庭であり、どこの家にも庭が必要だった。

それが母屋であるが、なぜ母屋に庭が必要だと言え、家は女であり、庭は男と見ていたから、昔は上棟祭に女の人が上がることができなかつた。

易学で言えば女は陰で男は陽になり、偶数は陰であり奇数は陽と鑑定し、女は陰だから、上棟の陽の男の立場を守り、乗る人の数を

奇数にした。

一般的には十一人や十三人……というように奇数の男の人が棟に上がり、女と見なした家を守る式典をした。

正月の三が日は、おせち料理を作り置きして、家の中で女の人を休ませる尊い日として、おせち料理を女とし、お屠蘇は男として、一年の計は元旦にありで、夫婦円満を祈り陰陽和合である。

だが家を全て女としたのではなく、門を男にすると玄関は女になり、玄関を男とすればお勝手口を女とし、陰陽和合の家庭が母屋である。

また母屋は田の字型の畳の部屋を作り親が住まいし、つぎ足した釜屋に台所を作り、東から東南に長屋を配し、作業場や若夫婦の住居とし、また不浄所（トイレ）、井戸などを据え付け、母屋の西や西南の離れに、老夫婦の隠居部屋を作ったのが、農耕民族の原型のコノ字型の母屋である。

昔から異張りと乾張りとされているが、母屋は張り出しも欠けさせることもない。

母屋の三分の二まで長屋を張り出しても、採光の影響が無いから

異張りと言ひ、西の離れは三分の一まで前を張り出してもよく、裏の方は余分に張り出しても差し支えがないと言われているから乾張りと言う。

母屋の大棟につき足しで釜屋を作ったのは、火事が起きれば大棟と釜屋を簡単に切り離すことができ、大難が小難に済むようにした棟梁の計らいである。

No. 6、朝廷の廷が庭。

庭とは廷のこと。

その廷とは官吏が並んで朝礼をするところだから、男が庭で奉り事を司るところになる。

上棟式にはまず建て始める前に、棟梁が四隅を清めて、匠師たちが安全に作業出きるように神様に祈ったから、広くまっすぐな平面が廷という字になる。

ちなみに師が付く人は匠師、教師、漁師、猟師、結い師、庭師などがあるが、その人たちはどんな人よりも位が高かったが、その位を自分で下げているのが現代の師じゃないのかなと思う。

昔は娘が嫁ぐときには、玄関から出さず庭先（おでい口）から嫁がせたところもあり、それは「二度と玄関の敷居をまたぐな」という悲しいかも知れないが、幸せになって欲しいという嫁がせる親心があったから、両家がもめることもなく穏やかに過ごせていたのだが、今の社会では出しゃばりを作ってしまい、遺産相続争いまで引き起こしているのが現状である。

それだけ延という意識があり、男側の立場を重んじて嫁がせた。

地方によっては、使っていた茶碗を「お前の茶碗はもうないから」と屋根に投げて、帰るところはないようにし、初客としてもてなす心配りを教え続けてきた。

だから嫁ぐ娘に家紋入りの着物を持たせた。

それも嫁ぎ先の家紋ではなく、嫁ぐ前の実家の家紋を。

なぜだともうかも知れないが、「実家の名を汚さず」「実家の誉れを落とさず」「嫁ぎ先に粗相がないように」と言う思いが込められている。

昔は初客という儀式を重んじ、嫁いだ娘さんは主人からの手土産を持って実家にお客として里帰りした。

親はお客さんに座ってもらうために座布団を用意し、そこに新妻は座り「主人からの心遣いです。これからも末永くお付き合いをよろしく願いますと主人が申しておりました」と渡し、受けとった親はそのまま床の間に持っていったから、名前が手前になるようになっていた。

新妻は座布団から一步も動けないし動いてはいけないので、もしトイレを使うなら「トイレを使わせていただきます」お茶が飲みたいなら「すみません。のどが渴いたので飲み物をいただけますか？」と言うだけで、もう自分の家ではなくお客だから。

つぎは家庭の庭に、大小の岩や石と大木小木を取り入れ、山川草木の模擬庭を作り、自然と共に生きることを考え、それに借景を取り入れた。

景色を借りる借景は大自然で雄大だから、大自然を男と見れば庭を女と見た。これも陰陽和合である。

庭だけを見ると大岩を男と見なし、小岩を女と見て夫婦岩の夫婦和合にし、どんなに小さい岩でも男にし、松を女にし、小苗の松で

も男とし大木でも女と見なした。

大木を男として見なし灌木を女とし、灌木を男として見なし草花を女と見て、庭に池を作り、庭全体を主人として見なし、池を長男として陰陽和合にし、池を南から西南よりに配置すると長男が伸びないとわれ、作ってもその方位の池は空池にしていた。

No.7、桃太郎と稲作の話。

桃太郎のおとぎ話になるが、この話は単なるおとぎ話ではなく、稲作農業を代々受け継いで欲しいという、五穀豊穰祈願の為に作られた話しである。

〔むかしむかしあるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました〕と始まり、〔大きな桃がどんぶらこ どんぶらこと川上から流れてきました〕という話を幼いころから親しんできた童話だが、これにも易学が隠されている。

まず川上を北とし、北は冬と真夜中であり陰とし、北は少年とし、冬や夜中に妊娠し、桃を木で出来たたらいに入れ家に持って帰り、

木のたらいを東に見なし春を現し、東である春に桃太郎が誕生した。

この桃太郎の桃は難を防ぐ厄除けとして扱われ、節分の節を作った。

節分は一月と二月の節であり、一月は丑月であり二月は寅月であり、東北に位置し男鬼門であり、丑の角と寅のパンツをはいている鬼を追い払う儀式で、柿太郎や梅太郎ではない。

桃太郎が東の位置で春に誕生したということは、稲作の稲の苗を現し、苗を育てるには、春先まで粃「もみ」を保管しておかなければならない。

これは子孫繁栄の準備である。

粃を苗に成長させ、お互いが助け合って田植えをしなければならぬので、一致団結するために桜の花見を愛で、いざ田植えとなり神社で毎年行われる五穀豊穰祈年祭の春祭りで活気を出した。

そして昔は村人が共同で作業をするのに廻り金神を編み出した。その廻り金神は怖いものでも何でもない。

春にくど、夏に門、秋に井戸、冬に庭、と言うように季節を重んじ、春におくどを直していれば、出遅れて共同作業が出来なくなるし、夏に門を直していればお盆に帰郷や親戚が訪れてくると、出迎え出来なくなるし、雨があまり降らない秋に井戸を掃除すれば、近所の人たちの井戸も濁り悪影響をする配慮があるし、冬に庭木を剪定すれば枯れてしまい良くないから、お互いが守り合うために廻り金神を戒めで考えた先人の智慧である。

No.8、桃太郎の鬼退治。

桃太郎の誕生は田植えのことであり、田植えが終われば、お米が実るように、米の字の八十八の如く人の手を借り、精魂込めて農作業に精を出したのである。

お日様が東から昇り、東南から南の位置に来れば頂点で、桃太郎も同じく成長し南の位置で成人した。

成人は七五三の人生の節目で、この数を足せば十五になり、昔の元服に当たり、桃太郎も無事に成長し元服を済ませ、いよいよ鬼退治である。

鬼退治とは干ばつや水害、疫病や飢饉だから、気をゆるめないために、一致団結で無事に刈り取りができるように、夏祭りでご祈願し盛り上げた。

それが七月は未月になり、八月は申月になる。

未申は女鬼門になり、女鬼門の西南から、男鬼門の東北の鬼退治に行き、未申の月を過ぎると九月になり、酉月で黄金色に実った稲を刈り取る準備の月である。

酉の前後は申と戌であり、桃太郎に吉備団子を分けてもらい、着いていった動物は、猿と鳥と犬であり、猿は素早く木に登ったり走り回り情報を得たり、鳥は大空から天候や気候をいち早く把握し、犬は臭いを素早く嗅ぎ分けて、飢饉や水害、疫病や飢饉など大難を小難に、小難を無難にした。

これは黄金色の稲穂が稔った五穀豊穡の豊作を意味し、桃太郎が猿と鳥と犬の情報を得て、鬼退治である自然災害から稲作を守り、無事に我が家に帰り着き、お祝いの秋祭りと十一月の新嘗祭になり、一年草の稲でありお米であり、日本の主食の伝統を守るために、桃太郎のおとぎ話を創った。

また酉は西に位置し、酉に「斗」を付け加えると（酒）になり、御神酒として神様に奉納した。

人間の身体が南に向けば、左手が東になり、右手が西になる。

なぜ東が左というのかは、春になると日がサンサンと照り輝き、田植えに丁度いい陽気が充満してくるから、日が足りる〔ひたり〕が左になり、五穀豊穰の新嘗祭に上げる酒は御神酒であり〔おみき〕であり「みき」が右になった。

昔から左団扇と言われるが、若人が左に当たり、年配者は右になり、左遷されると言うことは、若人と同じ立場にされる意があるから、若い内に精一杯働くと、定年になれば安泰だという戒め。

No.9、男鬼門と女鬼門。

つぎに鬼門と裏鬼門は共に陰陽和合になっていて、男鬼門に男の座敷の部屋を作らず、女の居場所の台所を作り、女鬼門に女の居場所を作らず、男の居場所の床の間を作り、その床の間から庭を愛で、清濁併せ呑むや表裏一体として陰陽和合にした。

また自分の家を南向きにて建てた場合、東隣から見れば西にな

り、東南は隣から見れば裏鬼門になり、鬼門は隣から見れば西北になるから、お互い三軒両隣が同じような家相を作ることにより、お互いの立場を守り合っていた。

お互いの家の張りや欠けは陰陽和合となっていて、お天道様をいただくために巽張りや乾張りにし、隣にお天道様を差し上げるために鬼門や裏鬼門を欠けさせた。

お互いが採光問題を大切にしたら、村が発展してきたのだと思う。

だが現在の家相は自分の家の中だけを気にして鑑定するから、間違った家相学や風水が発展してきたのでは…。

昔は正面の人と、はち合わせを避けるために工夫したり、隣の母屋が高ければ、自分の家の長屋や西の離れを平屋にし、争いやもめ事をさけたり、格子戸で視線を避ける工夫をしたり、垣根の高さを必要以上に高くせず、お互いが住み良い村造りをしていた。

陰陽和合や表裏一体や清濁併せ呑むが風水で四神旗となり、母屋を中央（黄色）とし鬼門や裏鬼門の威厳と尊厳を守り、

東（青や緑）に青龍の流れ、

南（赤）に朱雀の陽気、充滿の広野、

西（白）に白虎の交通の備え、

北（黒や紫）に玄武の山の守り、

この五色が現在の風水に用いられているが、昔の人は隣の人に迷惑をかけずに、また恥をかかせないようにと心配りをしていた。

No.10、お寺は寺社奉行から何の権限を与えられたのか。

江戸時代がどこの国を比較しても犯罪が少なかった理由は、寺社奉行がお宮とお寺にそれぞれの権限を与えたからである。

お宮は先に書いたように村民を一致団結させてお祭りを盛大にし、年貢であるお米を無事に納めることができるように、五穀豊穡の祈年祭や夏祭り、秋祭りや新嘗祭で活気を出させた。

お寺は何を与えられたのか？

それは通行手形を書く役目をお寺に権限を与えた。

なぜそれだけで犯罪が少なかったのか？

それはお寺には村人の先祖が祀られているからだが、今の社会では意味が分からないと思われるが、無理に法を強化しなくても、自然に犯罪が治まってきたのは事実である。

昔は「遠い親戚よりも近くの他人」を重要視していたからで、村人同士の絆が強く結ばれているのを、寺社奉行は理解していたからである。

例えば、江戸から上方に商談や湯治場の療養や参拝に出掛けたりするのに、「入り鉄砲出女」を防ぐために、必ず関所を通らなければならず、そのために通行手形が必要になるからだ。

通行手形がなければ、まかり通ることができないので、旅に出掛ける村人は、寺社奉行ではなく、お寺に行って書いてもらった。

お寺の住職は、必要な目的と街道と日付を明確に書き、最後にお寺名を書き記すことができた。

前にも書いたようにお寺には先祖が祀られていて、「先祖に恥をかかせたくないように」「親の恩に報いるために」「お隣さんや村人に恥をかかせないように」という気配りがあり、素行良く旅をした。

旅に出掛けるときは、道祖神やお地蔵さまや神社仏閣の前で「この村の悪口を言いません」と誓い、他の村を通るときは「この村に世間の悪評や不評を持ち込みません」と思う意識で道中を旅した。

素行良く旅をすれば、村の評判が良くなり、お寺に祀られている先祖に恥を欠かせないし、お寺の名が上がり、他の村人が通行しても、関所で必要以上に調べられないから、すんなり通ることができ
る訳で、お寺の名を盛り上げることで、村が安泰になるし、村人も
お互いを無言で守り合うことができたから、こぞってお寺を守って
いた。

またお寺には村人の過去帳が保管されているので、寺社奉行は村の人口も把握できて一石二鳥。

No.11、弔いは故人の親族を村人がもてなした。

昔は村の誰かが亡くなると、向こう三軒両隣の村人が協力し合っ
て弔った。

要するに、村人が故人の親族や親戚におもてなしをし、そのお返
しで四十九日に、故人の親族や親戚が、向こう三軒両隣の人たちに

おもてなしをしたのは、姉弟ではなく村人と共に暮らし、「遠い親戚よりも近くの他人」の絆を深めていた。

村人の誰かが亡くなると、弔いを円滑に運ぶための分担が決まっているから、すんなり事が運ばれる。

なぜすんなりいくのか？

それはお逮夜（たいや）という行事があり、農休みの時期を見計らい年に二回ぐらいあり、申し合わせた順番の家に夫婦で朝から出向き、買い出しやお互いが持ち合わせた野菜などを煮炊きし、和気藹々で昼食を食べ、その晩に夫婦でお経を唱えていた。

この習慣は村人の誰かがいつ亡くなっても、故人の親族に粗相のないように訓練していたから、お隣を借りるからお足り家（おたりや）なのである。

新婚ほやほやの若嫁さんも、村になじむようにその行事に参加し、隣近所の老婆から、「どこの嫁さんだね」「どこから嫁いできたの？」「ああ、あそこの嫁さんかね」と、自分が若嫁だったことを思い出し、早く村になじむように快く話しかけ、それぞれの分担の料理のこつなどの手ほどきした。

新前の若嫁さんも年寄りに教えられて、下準備の手伝いをしながら村になじんでいった。

村が発展するには、招き入れることを心がけたから、「あの村はいいおもてなしをしてくれた」「あの村に娘を嫁がせればいいな」「団結心があっていい村だね」「故人もきっと喜んでいるわね」と言うように悪い噂が立たず、いい評判が出るようにと村人の絆が結ばれていった。

No.12、近い親族はどうしていたか？

分家でも地類でも身内は、弔いにいっさい手や口を出してはいけないという決まりがあった。

たとえば、匠師が自分の家を自分で建ててはいけない。

お寺の住職が自分の家族を弔ってはいけない。

庭師が自宅の庭の手入れをしてはいけない。

教師が我が子を教育してはいけない。

医者が我が子の診察をしてはいけない。

駕籠かきはみずからの駕籠に乗れない。

というように他人のお陰を心がけていたからだった。

村のお陰だとか、隣近所のお陰を守り通していたから、村がすんなり円満にいていたので、親族はいっさい手出しをせず、ただ〔お呼ばれ〕に徹して、「ありがとう」と村人にお礼を申し上げるだけだった。

弔いを潤滑にするために男衆は、それぞれの役目に分担され、煮炊きの火の番や祭壇を組み立てる者、また故人を埋葬する墓地を掘り起す者は、朽ち枯れた墓標を探して掘り、そこから出てくる霊骨を、お寺の納骨堂に納めてから埋葬した。

墓標の「標」という字は、「木編に西と示す」を併せた文字で、木を西の外れに示すから、お寺や墓地は村の西に位置していた。

現在のように、個人の墓を建立するのではなく、墓標だけにして、朽ち枯れた墓標を探し、掘っては埋葬を繰り返していたから、墓地も増えることがなかった。

三河地方では火葬場や墓地を〔さんまい〕と言って、村が共同で運営し、墓地を増やさない工夫をし、村の団結心を計っていたのは、「一個人の徳をさらけ出さず」である。

いまはセレモニー会館などで家族葬が主だから、村人との付き合いもなく、人を立てずに墓を建て、姉弟だけが悲しみで集まり、立場も順序もなく勝手なことを言い合っているから、遺産相続争いをしているので、親族はその土地柄のセレモニー会館に任せることも必要ではないのか…。

昔は遠い親戚は、訃報を聞きつけても、やって来るのに何週間もかかった。

いまみたいに新幹線や飛行機や自動車もなく、歩いてやって来たからで、それも七日七日をめがけてやって来て、ようやく辿り着いても、故人にお参りするのでなく、村人にお礼を申し上げるためにやって来た。

No.13、遠い親戚はどうした。

やっと辿り着いた遠い親戚は、当然、弔いも済み、亡骸は埋葬されているので、故人の仮の祭壇に手を合わすのではなく「長い間、故人がお世話になりました。後に残った家族をどうかよろしく願いします」と村人にお礼を申し上げるためにやって来たのである。

御香典や御仏前は自分の名前を向こうに向けるのではなく、手前に向くようにし、「どうか村人のためにお使い下さい」「村人のおもてなしにお使い下さい」という意識で差し上げた。

いまでは「半分返すのが当たり前」「わたしの町ではこのようにしているから、これからはこのようにした方がいいわよ」と勝手なことを言っている姉弟が多いから、七日七日にもめ事を話し合う場所に化した。

村人は交代で七日七日に夫婦で集まり、男衆は仮の祭壇の前で、お経を唱え、女衆は故人の親戚をおもてなしするために、座布団を用意したり、七輪でお湯を沸かしたり、お茶菓子の準備をして待ち受けていた。

No.14、四十九日は親族が村人をおもてなし。

四十九日（満中陰）は、村人から七日七日に、丁重なおもてなしを受けた親族や親戚は、そのお礼を込めて、村人をおもてなしして、いままでの労をねぎらった。

いまでもその名残がある村もあり、村人の奉仕により弔いが無事

に済み、その日の晩に三日七日のお経も済み、故人の家で親族が村人の作った精進料理をいただき、親戚衆はお宿（お足り家）のお隣さんへ行き、食事をしている村人に、「この村はいいおもてなしをしているから、早速に村へ帰ってこの方法を取り入れてみたい」「故人はいい村に住んでいてうらやましいよね」「これからも故人に代わって家族を見守ってください」と、一人ひとりにお礼を言いながら、会話やお酌に回って、村人と故人の家族の絆を結ぶ役目をしていた。

親族は隣近所の絆を切らないために、出しゃばらずただひたすら見守ることにしていたが、今はどこかで絆が切れている…。

仏教は四十九日まで、神道は五十日祭まで、仏壇や御霊舎ではいっさい拝んでいない。

いまでは仏壇や御霊舎の扉を四六時中、開けたままにして家人が拝んでいるが、昔は自分の家の仏壇や御霊舎を拝まず、ご本尊様やご神体が汚れるから普段は閉めたままにしていて、村人が共同で拝む時に、村の代表者が開けて拝み、後は閉めていた。

No.15、親族のお見舞いはどうすればいい。

冠婚葬祭やお祝い事の前後にトラブルや病んだり、禍が起きたりする場合が特に多いのはなぜか？

弔いと同様に、親族や親戚は病人に直接お見舞いをしてはいけない。

親族は故人に手を合わすためにやってくるのではなく、村人にお礼を申し上げるためにやってくるという意味が分かれば、お見舞いも分かるはず。

故人を病んでいる病人にし、村人を長男夫婦に置き換えるとよく分かる。

村人の誰かが病むと、お互いが協力しあうことを誓う意味で、病人を見舞い、「あとのことは心配せずにゆっくり養生してね」「隣近所が付いているから鬼に金棒よ」というような意味を込めて見舞った。

昔は味噌や醤油、お米やもらい物、はしごや農機具、その他の物や道具など、生活に必要な物をお隣さんとで分かち合い貸し借りをしていた。

そのために木戸とか背戸という垣根や板塀の隙間から出入りして親密感を保って暮らしていた。

これも「遠い親戚よりも近くの他人」を大切にしていた工夫である。

いまでは兄弟姉妹が隣近所に住み、お隣さんを見たり、付き合いをしなくなったりして、絆が切れてしまい、親子だけの付き合いが多くなり始めてきたから、意味が分からなくなり直接に見舞うから兄弟喧嘩や親子喧嘩、夫婦喧嘩や隣近所のトラブルに巻き込まれてしまうのではないか。

そうならないために、親が病んだり身内が病んだりした場合、長男夫婦に労りの言葉をかけてあげること。

そうすれば、長男夫婦が親に「誰々がお見舞いに来た」と報告することができるから、親と長男夫婦との溝ができずに、平和に暮らすことができる。

No.16、お見舞いでも遠交近攻をしてはいけない。

〔兵法三十六計逃げるが勝ち〕という策があるが、その第二十三

計の策で「遠きと交わり近くを攻める」意である。

これは何を意味するかと言えば、すぐ隣の人を無視して、遠くの身内や親戚と仲良くしたり、隣の悪口を言ったりすれば、すぐお隣の住人と喧嘩になることと同じで、親が病めば長男夫婦の悪口を言い合い直接お見舞いに行くともめ事が起きるのが当然ではないか。

たとえば組の会合やお日待ちなどの集まりで座っている時、すぐ隣の人を無視して、そのまた隣の人に「今度野菜を持っていくからね」と声をかければ、すぐ隣の人にとってはいい気がしない。

だがこれを見てないところで平然としていて、「見えないからいいではないか」「黙っていれば分かるはずがない」と思うかも知れないが、「天知る、地知る、人が知る」と言うように、黙っていても神様は知っている。

No.17、立場と順序を守ること。

人には立場があるが、その立場を守ることが無くなり始めてきたのではないか……。

また犯罪も江戸時代から考えると、非常に増えたのではないかと

思われる。

それは携帯電話が普及し、向こう三軒両隣の意識がなくなり、身内や親戚だけではなく、甥や姪、おじやおばとの交流が深くなり、立場と順序のない付き合いが多くなり始めたからだと思う。

いま一度、お隣さんへの意識を高めてもらい、親姉弟との立場と順序を守ることを心がけてもらいたい。

そうすれば災害やいろんな禍や災難に遭遇しても助け合い精神で乗り切ることができ、平和に暮らすことができるのではないか…
…。

霊現象やラップ現象や悪霊はいっさいないし、家相の善し悪しよりも 「家相は人生の縮図なり」 だから、家は母屋であり 主人が奥さんに贈った最高の贈り物だ と思い、ご主人のお陰だと思えばいいだけ。

少しずつでも気づいて最光な人生を送って下さい。

あなたの命に出会えてありがとう。